

オックスフォード大学のモーダレン・カレッジの2号館に、キッチン・スティアケースと学生に呼ばれる部屋がある。階段の上り口に「ワイルド・バー」のプレートが掲げられているが、じつはワイルドが大学時代を過ごした部屋である。いまはボトルが並ぶバブになってゲーム器具も置いてあり、かつてワイルドやダグラス等のダンディたちが出入りした昔の俵はまったく残っていない。このバブでシェリーのグラスを傾けながら、先日興味ぶかい話をモーダレンの門衛の方から聞いた。

ワイルドのこの部屋の窓からは、チャーウエル河と岸の柳、それに橋がよく見下せる。その橋の上からある日窓に向って、何者かがワイルドを狙ってピストルを射った。弾丸は窓を破り壁に当たったが、幸い目標をそれた。ワイルドは指にはめていたダイヤの指輪の先で、ピュレットの穴のまわりにしるしを付け、それが最近まで残っていたというが、いまはその窓枠も壁も新しく代えられてしまった。思えば惜しいことである。狙撃の原因は、恋のもつれか争いの果てか、今となっては真実はその壁と共に永久に塗り込められてしまった。

ワイルドの研究者で同じモーダレン出身であり、学生時代をこの部屋で暮した Montgomery Hyde は、詳しいワイルドの伝記や作品解題を出しているが、この事件には触れていない。門衛の人の話では、このワイルド狙撃事件はモーダレン・カレッジ内で有名であり、弾丸跡を実際に見たことのある人から聞いた話であるという。ハイドはこの事件をあまり重く見ず記述していないのかも知れぬが、こうした種類の記録されない半伝説的挿話が、いくつもイギリスには残っているようである。

この門衛を私に紹介して下さったオックスフォードの教授だった方の家には、ワイルドが学生時代に使っていた机と椅子が保存されている。素材はイチイの木、茶レザー張りの

## ワイルド研究の おもしろさ

井村君江

ヴィクトリア調デザインのがっちりした机である。教授の停年退職に伴って、オックスフォードからコンウォールに運ばれ、ワイルドの母で『古代アイルランド伝説』の著者である Jane Frances が好むであろう伝説の島聖マイケル山の城を見逃かす窓ぎわに置いている。かつてこの机の上にワイルドの手が走り、数々の作品が生まれていたのである。

Hart Davis のワイルド書簡集は、研究の第一資料として欠かせない貴重なものであるが、まだここに収録されていない手紙も現存しているらしい。ケンブリッジの教授である方が、祖父とワイルドの名誉のために、と発表を控えているのである。遺族の方の心情や制約がもう少し緩やかになって、こうした未完の資料が世に出れば、また新たな伝記の側面が明らかになるであろうし、作品への新しい接近の仕方も生まれてくるかも知れない。少なくともワイルドは、『幸福な王子』をこの人物にデディケートしているのであるから。

こうした未公開の半伝記的事実やら書簡などが、まだイギリス本国には存在しているようである。青年期まで生活していたアイルランドに、文人として活躍した時代のフランスに、講演者として巡ったアメリカ各地に、そして旅行者として訪れたイタリア・ギリシャに、更には実現しなかったが、訪問を望んでいた日本への関心の裏にあったものは——とワイルドの行動範囲を広げて考えてゆけば、まだヴェールに包まれている部分、これから蒐集され分ってくる事実が存在する可能性もあるようだ。イギリスでは最近、ロンドンでの家庭生活の協力者であった妻 Constance の伝記が続いて出ている。研究者の立場から言えば、まだ資料発掘が続けられている作家は、今後も新しい研究のアプローチの出来る興味ある研究対象である。そして、タレントは文学に用い、ジーニアスを生活に用いていたワイルドの生涯の挿話は、小説の一頁のような重みさえあるのを感じるのである。(明星大学教授)

